地　教　史　学　通　信	第 160 号 2023 年 7 月 5 日 全国地方教育史学会

いよいよ本格的な夏が到来する季節となりました。会員の皆さまにおかれては、ご健勝のこととお慶び申し上げます。今年度の第 46 回大会は、軽部勝一郎史会員のご尽力により資料見学会・研究発表を兵庫県神戸市で行いました。当日は、多くの皆さまのご協力・ご参加を得られましたこと、心より御礼申し上げます。今号は大会報告・3 名の大会参加記、杉浦幹事による「地方の状況」、事務局からの諸連絡をお伝えします。

I. 大会報告

全国地方教育史学会第 46 回大会記

軽部勝一郎（甲南女子大学）

2023 年 5 月 27 日（土）・28 日（日）の両日にわたり、第 46 回大会を神戸にて開催いたしました。新型コロナの影響で一旦中止となりました神戸大会を、昨年度の札幌大会に引き続いて対面で開催できましたことはなによりの喜びです。晴天の下、史料見学会に 28 名、懇親会に 27 名、研究発表・シンポジウムに 48 名（いずれも非会員を含む）と多くの方々がご参加くださいました。お越しくださいましたみなさまにこころより御礼申し上げます。

27 日は甲南大学（神戸市東灘区）にあります甲南学園史資料室にて史料見学会を実施いたしました。資料保存業務の中心的存在である甲南学園総務課の溝上真理子様に、キャンパス内の歴史的遺構、資料室、資料保存庫をご案内いただきました。阪神・淡路大震災に遭遇し創立当時の建造物は失われていますが、キャンパス各所に設置された銅像・記念碑をご紹介いただき、学園の歴史に思いを馳せることができました。資料保存庫では学園創設に大きな役割を果たした平生釟三郎の日記原本を手に取って拝見する機会を設けていただきました。ご案内くださった溝上様が平生の日記原本を「学園の宝」と表現されたのが印象深く、資料はそれを価値あるものとして理解された方々の存在無しには保存し得ないことをあらためて痛感いたしました。溝上様に見学会のご依頼に伺ったのは 2019 年の春でした。コロナ禍を挟んで見学会をご準備くださいました溝上様にこの場を借りましてこころより御礼申し上げます。見学会後の懇親会では須田事務局長が司会進行くださり、和やかな趣のなかでみなさまに灘の酒をお楽しみいただきました。

28 日は甲南女子大学（神戸市東灘区）にて研究発表・シンポジウム・総会を開催いたしました。研究発表では 14 名の会員が登壇くださり、3 つの会場に分かれて活発な質疑応答が展開されました。発表者、そして司会をお引き受けくださいました会員のみなさまに感謝申し上げます。午後のシンポジウム「地域の教育史資料の収集・保存・活用」では、歴史資料ネットワーク代表委員の奥村弘先生、国立公文書館認証アーキビストの小宮山道夫会員、元中学校長の知本康悟会員（『通信』159 号で知本会員を「元小学校長」とご紹介しました。こちらの手違いでした。お詫び申し上げます。）からご自身のご研究とご経験にもとづいたご提案を賜り、資料保存にかかわり本会の役割を考える貴重な機会となりました。とりわけ奥村弘先生は、一橋大学にて開催された歴史学研究会大会にご参加後に、本会のシンポジウムに駆けつけてくださいました。奥村先生にはこの場を借りましてこころより御礼申し上げます。シンポジウムには高橋俊雄 NHK 解説委員も参加されていました。意義深いシンポジウムを企画くださいました野口穂高幹事に感謝申し上げます。

ご参加のみなさまにご不便をお掛けしない大会をと思い準備を進めましたが、結果として、宿泊場所の確

保、会場へのアクセス、2 日目の昼食環境の点でみなさまにご不便をお掛けすることになってしまいました。大変申し訳ありませんでした。

史料見学会、懇親会、研究発表、シンポジウムという多彩なプログラムが 1 つのまとまりをもって運営されるところに、全国地方教育史学会大会の魅力と意義があると私は考えております。今回は「失われゆく地域の教育史関係資料の保存、継承」がテーマであると認識して準備を進めました。史料見学会場の甲南大学、懇親会場『櫻宴』を経営する櫻正宗、研究発表・シンポジウム会場の甲南女子大学、いずれも阪神・淡路大震災で被災し、その後、復旧を遂げて現在に至っています。復旧に際しては多くの方々の言葉では言い尽くせない努力があったと思います。地震や水害などの自然災害の多発や社会の変化に伴う遺産継承の難しさなど、地域の教育史資料をめぐる困難な状況がシンポジウムでは示されました。資料の散逸を防ぐために本会ができることはなにか、その具体的な方法を考えていくことは本会のあり方を考えていくことにもつながります。本会の今後のあり方を考えるうえで、今大会がいくらかでもお役に立てたのであれば幸いです。大会にご参加くださいましたみなさまにあらためまして御礼を申し上げます。

【大会参加記】

大会参加記

寺澤雪穂（お茶の水女子大学院生）

この度は、第 46 回大会でたいへんお世話になりました。両日天候に恵まれ、昨年以上に発表者も多く盛況な大会で、開催のご準備をしてくださった軽部会員はじめ、幹事のみなさまには心よりお礼申し上げます。

初日の甲南大学での見学会では、校内碑、甲南学園史資料室及び資料収蔵庫をご案内いただきました。校内碑で印象に残ったのは、1995 年 1 月に起きた阪神淡路大震災で亡くなった学生を哀悼するための災害記念碑です。記念碑には学園創立者、平生釟三郎の名言「常ニ備ヘヨ」が刻まれていました。その綺麗なキャンパスからは被害の実態を想像できませんでしたが、資料収蔵庫でも、大学でまとめた震災の記録を閲覧する機会に恵まれ、当事者が被災を真摯に受けとめていることがよくわかりました。

2 日目の研究発表は第 1 会場で拝聴しました。高田会員は「「学事賞与例并学事奨励品附与例」への府県の対応―東京府の事例を中心として―」、竹内会員は「村内融和策としての小学校運動会～一八九〇年から一九二〇年代長野県北信地域を中心として～」、田中会員は「岡山県倉敷市公立幼稚園における資料保存と活用に関する一考察」、長谷川会員は「「長野師範学校男子部粛学事件」における「政治的中立」概念―戦前との連続に着目して―」、杉山会員は「戦後初期における教員議員の政治参画：徳島県の場合」をご発表されました。高田会員は、「政策側にとって望ましいものを選抜し権威づける＜実際の範型化＞という機能と、他者が見習うべき範型の普及を図る＜範型への他者の同調＞という機能」（高田会員のレジュメより）として、賞与がどの程度有効であったかを検討することに挑戦されていました。竹内会員は、「記念」運動会が村内紛争の解決を記念するものだったという仮説に基づいて考察を加えてらっしゃいました。多くの事例から検討されていて、日頃の資料調査の積み重ねが詰まった研究発表でした。田中会員は、ご自身が取り組まれている内容を中心に、幼児教育資料の収集・保管状況について課題を述べられました。資料収集のために歩いた地域、出会った人、そこで生まれている地域住民の軋轢など、研究発表には反映されない生々しさについて、田中会員のご発表に多くの方は共感して聞いておられたのではないでしょうか。長谷川会員は、「政治的中立」という概念がどのような文脈に位置づけられていたのかを検討されていました。「政治的中立」の背景にある政治そのものがどのような状況にあるのか、思いを馳せながら勉強させていただきました。杉山会員は、徳島県議会会議録を中心に教員出身議員が果した役割を検討されていました。レジュメには会議録が直接引用され

ており、議員の熱量に圧倒されました。以上、第1会場のみなさまには、勉強の機会をいただき感謝させていただくとともに、ここでの紹介が不十分になってしまったことをお詫び申し上げます。

2日目の午後は、公開シンポジウム「地域の教育史資料の収集・保存・活用」が開催されました。神戸大学の奥村先生（非会員）は「地域歴史遺産としての歴史資料―大規模自然災害時の地域歴史資料保全から考える―」という内容でご発表されました。阪神淡路大震災の資料や地域住民が保管していた資料を保存し、住民を主体に、歴史文化を継承する活動をご紹介いただきました。社会の課題に応じて研究者にできることを考えていく、そしてそれを実践に移すことを実行されており、自分には何ができるのかを問わずにはいられないご発表でした。次に、小宮山会員は「教育史資料の生成と継承に関する現代的課題―小学校における文書管理の実態から―」という内容で、こちらも小宮山会員が取得されている国立公文書館アーキビストについてご紹介していただき、たいへん刺激を受けました。また、学校資料・地域資料が眠っている状況のなかで、地方教育史に取り組む研究者は、その資料的価値を伝えていく使命を担っているのだと学びました。最後に、知本会員は「学校資料の今とこれから～なぜここまで問題であり続けたのか～」という内容で、ご自身が校長在職中に著作された学校史をご紹介いただきました。『深浦学校物語』（知本会員著、2011年）には、子どもの版画（漁師を生業としている家庭で、91歳の祖父を彫ったもの）が挿入されており、繊細かつ力強さを感じました。それと同時に、学校統廃合は、子どもたちの学校での生活の思い出もなくなってしまうことを意味するのだと気付かされました。このテーマは、会員のみなさまにとって、長年の懸案事項であるかもしれません。ですが、今回はむしろ、地域資料の収集・保存・活用に関するエキスパートの方々のお話しを聞いて、解決の曙光が見えはじめているといってもいいのではないでしょうか。

近年、行政文書の改ざんや隠蔽がニュースで取り上げられるなか、私たちの生活基盤が知る権利に支えられていることを痛感します。日頃から資料に触れることのできる私たちだからこそ、その権利を行使し、そして、権利の内実を高めていくことも視野に入れる必要があると感じました。

第46回大会に参加して

福原　充（和洋女子大学）

新入会員の福原充と申します。2022年度より千葉県にある和洋女子大学全学教育センターに着任し、同大学でお世話になっております菱田隆昭会員よりご紹介いただき、この度入会いたしました。大正新教育運動に関心を持って研究をしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、学会活動を対面で実施することが困難な状況にあって、全国地方教育史学会は昨年度より対面での実施を再開されたと伺い、甲南大学・甲南女子大学で開催される第46回大会への参加をとても楽しみにしておりました。初日の資料見学会は、2019年に創立100年を迎えた歴史ある甲南学園について、実際に現地で五感を使いながら、同学園の歴史にふれる、学べる機会となり、大変貴重な時間を得ることができたと感じております。また、その後の懇親会も、新入会員である私を温かく向かい入れてくださり、地元の美味しいお酒とお食事も堪能しつつ、充実した時間を過ごすことができました。

翌日の研究発表では、1940年代の国民学校令下、戦時教育令下の研究を中心とした第2会場に参加をいたしました。養護学校の成立過程に関する研究や映画教育の実践事例に関する研究、当時の「教育の崩壊」過程について、地方への浸透過程や学校日誌、女学校の勤労動員等を手掛かりに迫ろうとした研究等、どれも意欲的な研究で密度が濃く、戦前を含めた戦時下と戦後の連続性をどう位置づけるのかということについて、改めて考えさせられる時間となりました。

最後に実施されたシンポジウム「地域の教育史料の収集・保存・活用」では、歴史研究において最も重要である「史料」に関する世間一般の認識と共有・活用に関する厳しい現状とそれに対する展望が報告され、従来の研究者や教育現場、行政だけでなく、「普通の市民」も参加しながら如何にして歴史を遺していくか、創っていくのかということについて問われているのではないか。また、現代において「時間と手間をかけて歴史と向き合う」ことをどのように前向きに捉え直していくのか、共に学び合う「場」をつくっていくのかということ等を自分の中で考える時間となり、今後も継続的に考える課題をいただけたのではないかと感じております。充実した2日間を過ごさせていただき、誠にありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

大会参加記独り言

逸見勝亮（北海道大学名誉教授）

◇僕の耳に時折それも苦しい時に、教育史学会第19回大会（1975年、秋田大学）シンポジウム「地方（地域）教育史研究」で聞いた「教育史研究における「地域の実態研究」」（中村一雄）が響く……

◇それはそれとして、僕は「東京航空計器株式会社（川崎市）への水沢高等女学校3年生の勤労動員」を、やっとのことで発表した。主に依拠したのは水沢高等女学校第二十・二十一回卒業生編・発行『こころに生きる六十日――水沢高女東航動員記』（1986年）である。

僕は、国と軍需工場の求めに応じて通年勤労動員に従い、生き抜きあるいは病を得て夭折した水沢高女1942年度入学者たちを、川崎市中原区木月の動員先、横浜市港北区南綱島の宿舎、東京横浜電鉄（東横線）敷設・地域農業の変容・宅地化と重工業化の進展、生徒の出自（地主制の変容）、北上川中流域における中島飛行機疎開工場の展開、米軍空襲、生徒の家族の従軍・戦死等の諸要素のなかに、置き直してみたかった。

それが十全に達成できたら、川崎への通年動員を評するに「戦場に飛び込んだ」との耳慣れた言葉によりかかる域を脱し、彼女たちの回想・日記は光彩を放つに違いない。

◇かつて聴いた「君、歴史研究は須く地方史研究たるべしですよ」、「教育史の独自の方法があるのかね。一番おもしろいのは政治史だよ」なる教授らの言が、今また僕の思考を掻き乱している。

◇やっとのことで発表に漕ぎ着けたのだが、報告中に「水沢における動員先を」と別の僕が呟くのを「静かにしてろ」と諫め、手の内と恥をば曝して前に進む覚悟ができた。　　知友も得たではないか。

【総会報告】

1.『地方教育史研究』編集規程・投稿規程の改定について

昨年度、みなさまにご審議・選出いただいた荒井会長・常任幹事会のメンバー間で、学会の在り方の再考を進めております。2022年12月よりWGを設置しつつ、この間、「大会（資料見学会）」「通信」「紀要」などの再検討を行ってきました。特に「紀要」では、投稿機会をより幅広い会員に開くため、以下の2点が要改善点として挙げられました。

①これまでの「大会発表者に投稿の権利」という条件を削除

②「研究論文」に加えて、「史料紹介（解題付き）」の投稿枠を新設

2023年5月28日の総会において、この点を反映した「編集規程」「投稿要領」の改定が採決されました。5月31日に本学会HPで告知、6月上旬にはメールおよびお便りで会員に周知した通りです。

（その後、6月末締め切りまでに多数の会員から投稿エントリーがありました。感謝申し上げます。）

２．来年度の大会校について

常任・全国幹事会での事前調整を経て、これまで候補に挙がっていた藤女子大学（大会校・大矢一人幹事）にお願いすることといたしました。詳しい日時等が決定しましたら、次回以降の通信または HP 等にてご連絡いたします。

Ⅱ．全国幹事による「地方の状況報告」

2018 年の常任幹事・全国幹事の改選以降、常任幹事は開催校に代わって大会シンポジウムの企画・運営をすることが、全国幹事は任期中に少なくとも一回、ご自身にとって身近な「地方」（住所 or 勤務先 or 研究フィールド）における「最近」（おおむねここ 10 年）の教育史の研究状況、史資料の刊行・発見などに関する情報を執筆することが新たな役割として課せられました。今回はご多忙のなか、杉浦幹事にご執筆をお願いし、多彩な情報が満載の玉稿をお寄せいただきました。

＊＊＊

岩瀬文庫と『新編西尾市史』編さん

杉浦由香里（滋賀県立大学）

はじめに

西尾市は、愛知県の中南部に位置し、西に矢作川、南に三河湾を臨む地域である。鎌倉時代に築かれた西条城（後の西尾城）を拠点に栄え、江戸時代に松平家が入城すると六万石城下町として発展した。1871（明治 4）年の廃藩置県により西尾藩は西尾県となったが、同年 11 月には額田県に統合され、翌年、額田県と愛知県が合併して新愛知県が誕生した。1878 年の幡豆郡発足以後、西尾町に郡役所が設置され、西尾町ほか 18 村が幡豆郡に属した。戦後は、1953 年に市制が施行され、西尾市は西三河南部地域の中核的都市として発展してきた。

2011 年 4 月、西尾市と幡豆郡一色町・吉良町・幡豆町の１市３町が合併し、新「西尾市」が誕生した。これを契機に、2013 年より『新編西尾市史』編さん事業が開始された。筆者は、2019 年より『新編西尾市史』の近・現代部会の特別執筆委員となり、朝日大学の山下廉太郎会員とともに近・現代の教育史を担当している。

以下では、『新編西尾市史』編さん事業の拠点である西尾市岩瀬文庫を紹介するとともに、西尾市域の教育史料および学校所蔵資料の保存状況について紹介したい。

１．西尾市岩瀬文庫

（1）岩瀬文庫のあゆみ

岩瀬文庫は、1908 年に実業家である岩瀬弥助が創設した私立図書館である。岩瀬弥助は、1867（慶応３）年に旧西尾城下の肥料商の長男として生まれた。商才を生かして西三河屈指の資産家となった後、弥助は書物を通じた社会貢献を志し、私財を投じて設立したのが岩瀬文庫であった。

弥助の死後、岩瀬文庫は財団法人によって運営されてきたが、1955 年に西尾市立図書館岩瀬文庫となった。岩瀬文庫は 1994 年に文化振興課に移管され、2003 年に日本初の古書の博物館西尾市岩瀬文庫としてリニューアル・オープンした。

現在、岩瀬文庫は、西尾市立図書館に隣接し、大正時代に建築された旧書庫や旧児童館は国の登録有形文化財となっている。旧書庫は桟瓦葺、寄棟造、煉瓦造、地下１階地上３階建の洋風建築で、書庫の開口部には防火防犯のための鉄製扉が取り付けられた堅牢な造りであった。それゆえ、1944 年の東南海地震と翌年の

三河地震の際にも倒壊することなく、蔵書を守り抜いた。

2003 年に新収蔵庫が完成して以降、岩瀬文庫の蔵書はすべて新収蔵庫に収蔵されている。旧書庫は、普段は非公開だが、一年に一度開催される「にしお本まつり」の際にのみ特別公開される。旧児童館は現在も西尾市立図書館おもちゃ館として活用されている。

(2) 岩瀬文庫の蔵書

岩瀬文庫には、弥助が各地で収集した貴重書が納められており、重要文化財を含む古典籍から近代実用書まで、幅広い分野と時代の蔵書８万冊余りが保存・公開されている。蔵書の多くは江戸時代以前の和装本で、歴史、文学、本草、宗教関係の稀書珍書が多い。重要文化財の「後奈良天皇宸翰般若心経」、京都本草学者山本亡羊の平安読書室旧蔵本のほか、唐本や韓本まで、多種多様な書物が所蔵されている。

岩瀬文庫の蔵書目録は、1936 年に作成された『岩瀬文庫図書目録』を使用している。『岩瀬文庫図書目録』は、八門分類に則り、下記のような分類法が採用されている。

第１門　神書及宗教
第２門　哲学及教育
第３門　文学及語学
第４門　歴史・伝記・地誌・紀行
第５門　国家・法律・経済・財政・社会・統計学
第６門　数学・理学・医学
第７門　工学・兵事・美術・諸芸及産業
第８門　叢書・随筆・雑書・雑誌・新聞紙
第９門　三州史料

この分類や配架方法は、弥助自身によって作成されたもので、1908 年刊行の「岩瀬文庫図書目録」第一版から継承されたものとされる。

現在は、名古屋大学の塩村耕教授を中心とした岩瀬文庫資料調査会による悉皆調査をもとに「古典籍書誌データベース」が構築され、インターネットを通じた簡易検索が可能となった。キーワード検索で「教育」を入れると教育分類の資料が 400 件ほど表示される。教育分類の資料として注目されるのは、足利学校関連の資料が多数所蔵されている点である。詳しくは、西尾市岩瀬文庫／古典籍書誌データベース（https://adeac.jp/iwasebunko/top/）を参照していただきたい。

(3) 岩瀬文庫の利用について

岩瀬文庫の開館時間は午前９時から午後５時、文庫資料の閲覧は４時までとなっている。休館日は月曜日と年末年始、館内整理日（7～9 月を除く第三木曜日）で、入館料は無料である。

２階には常設展示室と企画展示室、閲覧室がある。常設展示室では、日本の書物文化を概観することができる。企画展示室では年５回、さまざまなテーマで岩瀬文庫の蔵書を紹介する企画展が開催されている。

岩瀬文庫の蔵書は、18 歳以上なら誰でも２階の閲覧室で閲覧できる。「余嘗欲設立一小文庫施之於身於人且伝之于不朽」という弥助の理念を継承し、重要文化財の古典籍であっても実際に手にとって閲覧することが可能である。一回につき 30 冊まで閲覧できる。ただし、館外への貸出は行っていない。閲覧複写サービスは、マイクロフィルムからの電子複写を１枚 50 円で受け付けている。

なお、地階には 30～50 人収容の研修ホールもあり、研究会や勉強会の会場として無料で利用できる（要

予約)。

２.『新編西尾市史』編さん事業

⑴『新編西尾市史』編さん事業の概要

さて、『新編西尾市史』編さん事業は、2013 年度から 2029 年度を目処に、本編５巻、資料編 7 巻、別巻４巻の計 16 巻を刊行する計画となっている。近・現代部会では、明治維新から平成の合併による新西尾市成立までの 140 年間を対象に、資料編１巻（近・現代）と本編２巻（近代１と近代２・現代）を刊行予定である。

現在の西尾市域は、幡豆郡一色町・吉良町・幡豆町と合併したことにより、ほぼ旧幡豆郡の領域に相当している。旧西尾市では、市制 20 周年を記念して 1980 年までに『西尾市史』史料編４巻本文編５巻を刊行している。吉良町では 1986 年から町史編さんが開始され、1999 年までに『吉良町史』資料編５巻本文編３巻が刊行された。他方、幡豆町では 2005 年から町史編さん事業が進められ、西尾市に合併後も西尾市史編さん業務に組み入れられて『幡豆町史』資料編３巻本文編３巻が 2016 年までに刊行されている。『新編西尾市史』では旧幡豆郡としてのまとまりを意識して、旧『西尾市史』はじめ『吉良町史』『幡豆町史』を超える近現代教育史の叙述を目指したいところである。

なお、市史編さん室は、西尾市岩瀬文庫内に設置されており、新収蔵庫の３階が西尾市内の文化財や歴史資料を保管する文化財収蔵庫となっている。旧『西尾市史』編さん時に収集した資料をはじめ、西尾市民による寄託・寄贈資料、旧自治体資料などが多数保存されている。ただし、収蔵庫内は一般には非公開となっている。今後、歴史資料の公開をどのように行なうかは市史編さん事業後の課題といえよう。

⑵教育史料の収集と課題

西尾市域の教育的特色として、近代においては「私立英語学校」「西尾幼稚園」「幡豆郡立農蚕学校」が挙げられる。これらは旧『西尾市史』でも詳述されており、ある程度まとまった資料が残存している。このほか、近代の教育史料として注目されるものに、大正期に発行された幡豆郡教育会『会報』、幡豆郡教育会・幡豆郡農会『幡豆郡報』がある。また、学校所蔵資料の調査によって、西尾尋常小学校の校誌や西尾中学校、西尾高等女学校の校誌・同窓会誌等の収集が進んだ。近代教育史に関しては、新史料をいくつか発掘することができ、旧自治体史を超える歴史叙述の可能性が見えつつある。

問題は、現代教育史の資料収集である。学校所蔵資料は、学校によって残存状況が大きく異なっており、戦後教育資料の散逸が著しい。永年保存であるはずの学校沿革誌をみせてもらえない学校もあり、所在不明なのかすらわからないような状況もある。学校新聞や PTA 新聞の類も、創刊号から現在までを通じて保存している学校は極めて少ない。

『新編西尾市史』編さんの対象範囲は 2011 年までだが、直近の 1990 年代以降の資料収集が最も難航している。教育委員会刊行の資料すら体系的に保存されていないことに衝撃を受けたところである。旧西尾市は、2002 年の新学習指導要領全面実施を受けて 2004 年から２学期制を導入していたのだが、合併を機に旧３町に合わせて３学期制に戻した。現代教育史として扱うべき史実と思い、教育委員会に２学期制導入に関する資料について尋ねたところ、「わからない」、「残存していない」という返答にとまどうばかりであった。結局、教育委員会事務局の倉庫を拝見させていただいた際に、関連資料を見つけることができたのだが、教育史料の保存に危機感を覚える経験となった。

西尾市域の伝統校といえば、西尾中学校・西尾高等女学校の流れを汲む西尾高等学校が挙げられるが、学

校資料の保存状況は芳しくない。物置と化した教室に戦前の西尾中学校や高等女学校関係資料が無造作に段ボール箱に入れられて放置されているような状況であった。

他方で、戦後創設された一色高等学校の資料保存は目を見張るものがあった。一色高等学校では、「いちこう博物館」と名付けられた一室に、創設以来のあらゆる学校資料が体系的に整理整頓されて保存されている。学校日誌、学校管理案、学校要覧、研究報告書、PTA 関連資料、同窓会資料、学校新聞、生徒会新聞、PTA 新聞、進路のしおり、修学旅行のしおり、卒業アルバム、行事アルバム等々が、時系列に整理されている。感心したのは、近年ホームページに掲載しているであろう学校だよりまでも印刷してファイルに保存していた点である。いちこう博物館には、開校時を振り返る展示ケースが置いてあったり、名鉄三河線が廃線になった際に譲り受けた「西一色」の駅看板や時刻表、料金表があったりと、同校の歴史を感じられる空間になっていた。学校資料保存のモデル校になりうる取り組みといえる。いちこう博物館は、すでに退職された学校職員の尽力によって築かれたものとお聞きしたが、先人の資料保存の努力が今後も継続されることを願ってやまない。

おわりに

学校所蔵資料の調査を通じて、教育史の観点から学校文書の保存のあり方を見直す必要を痛切に感じている。既存の学校文書の保存年限は、教育史の観点からみるとあまりに短い。特に、教務関係資料が 5 年や 10 年で廃棄されていく状況をこのまま看過していいのだろうか。学校文書の教育史的価値について積極的に提言し、後世に継承することは現代に生きる教育史家の使命であろう。戦後の教育史料の散逸を防ぐことは喫緊の課題といえる。微力ながら教育史家としてできることを考えていきたい。

＊＊

III. 諸連絡

【寄贈図書】

・吉川卓治会員より：『愛知県教育史』第 6 巻、2023 年 3 月。本学会員の執筆者：吉川卓治、吉川卓治、杉浦由香里、釜田史、益川浩一、林、内田純一。第一章新学制の整備と再編（第一節教育今日財政制度の確立と変容／第二節小・中学校の新たな試み／第三節障害児教育の模索／第四節高等学校教育の整備と変容／第五節高等教育の構造変化／第六節教師教育改革の具現化／第七節幼稚園と保育所の振興／第八節社会教育の進展）、第二章伊勢湾台風と教育（第一節伊勢湾台風の概要と学校の被害／第二節救援活動と復旧・復興／第三節教訓の継承）、第三章高度経済成長期における教育の展開（第一節教育行財政の発展・拡充／第二節標準化する小・中学校／第三節障害児教育の拡大と組織化／第四節高等学校教育の拡充と多様化／第五節高等教育の大衆化／第六節教師教育の再編成／第七節幼児教育と保育の発展／第八節社会教育の変転）

・井上兼一氏より：『教育三重史料研究』第 2 集、2023 年 5 月。本学会員の執筆者なし（参考：神山栄治「三重県教育委員会の組織（Ⅰ）、井上兼一「三重軍政部撤退後の高等学校学区制の改正」、松村勝順「戦後の教育の民主化と PTA－三重軍政部による PTA 結成の勧奨と支援－」、野々垣明子「三重県教育委員会による民主主義普及のための講座の開催と実施」、太田光俊「終戦直後の櫛田国民学校における新教育（1）－西山文雄旧蔵『自発性社会性の原理に立脚する櫛田教育』から - 」」

・名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育史研究室より：『教育史年報』第 27 号（2022 年 3 月）、同第

28 号（2023 年 3 月）。第 27 号の本学会員の執筆者：高田麻美（実践報告「新型コロナ感染拡大下における ICT を使った授業への取り組みと課題（2）」（共著））、杉浦由香里・山下廉太郎（資料紹介「滋賀県立彦根東高等学校所蔵彦根中学校関連書簡 - 彦根中学校開設をめぐる旧彦根藩士の動向 - 」）。第 28 号の本学会員の執筆者：吉川卓治（論文「鹿児島時代の佐多愛彦 - 家族／医学との出会い - 」）、高田麻美（論文「生徒自治を育てる特別活動のあり方 - 長野県師範学校『旅行日記　全』（1901 年）を手がかりにして - 」（共著））、林喜子（資料紹介「昭和戦中期の愛知県におけるある女性の小学校経験 - 私立南山小学校・名古屋市八事国民学校・犬山町国民学校 - 」）

Ⅳ．事務局より

【『地方教育史研究』第 44 号の発送について】

2023 年度会費を納入いただいた方に、5 月 30 日付で発送済です。

【紀要のバックナンバーについて】

紀要のバックナンバーを購入することが可能です。1 部につき 1,000 円（送料込み）です。在庫及び詳細については、学会 HP 内の「紀要」→「『地方教育史研究』バックナンバー」をご参照ください。

全国地方教育史学会 事務局

〒171-8588　東京都豊島区目白 1 - 5 - 1　学習院大学文学部教育学科 須田将司 研究室内

TEL／FAX　03-5904-9341

E-mail　masashi.suda@gakushuin.ac.jp

公式 HP　https://w3.waseda.jp/assoc-zckyoiku/